

攝取不捨の世界

稻葉秀賢

人が感ずる恐怖の中に於いて、最も深い恐怖は「見えざるもの」への恐怖である。普通に外界と云はれる質料的世界に於いて、多くの恐ろしきものが存在するけれども、

その多くは可視的なるが故に、この恐ろしきものへの防衛手段が人間的知性に依つて遅しく考慮せられ、それは恐るべきものではあつても、我々を徹底的に屈服せしめるほど恐ろしいものではない。例へば猛獣毒蛇は恐るべきものである。然し恐るべきものであるが故に、闇の中にあつても、太陽の照明の中にあつても、殆んど全き防衛手段を我々は有してゐる。されば我々人間は、その存在性を彼等に依つて根本的に否定せしめられるといふこととはない。或は又病菌の如きも、肉眼的には可視的でないけれども、それを可視的ならしめる我々の知性は、そ

れに依つて我々の存在性を根柢的に脅されるものではない。それ故に可視的なる世界を外世界と名づけるならば、眞に恐るべきものは外世界には存在しないと云へるであらう。

然るに、見えざる我々の内世界に於いては、我々の存在可能を否定する如き恐ろしいものが明かに存在する。外世界の賊は可視的なるが故に恐るべきでないが、内世界の賊こそ恐るべきである。内世界の賊は實に見えざる賊であるから、この見えざる賊が意識せられる時、そこそこ我々の存在を根柢から動搖せしめる如き恐怖を感じしめずにはない。例へば、三苦の一に數へられる苦苦の如く、所縁の境そのものが與へる苦痛よりも、それを所縁として苦惱する我々の内世界的なるものが、最も強く我々を苦惱せしめる。されば外世界の可視的なるものは眞に我々を恐怖せしめるものではなくて、この外世界的な

るものを所縁として動搖せしめられる内世界的なるものこそ、我々を最も深い恐怖に陥れる。恐ろしいと思ふ心ほど恐ろしいものは存在しない。しかしこの場合にも、その所縁となるものが、可視的外世界的である限り、その恐怖は我々にとつて根柢的ではない。我々の知性は飽くまでこの恐怖と抗争し、それを克服せざるにないからである。そして克服し得ると確信する處に我々の知性の逞しさがある。然るに人間知性がその鋭敏にして撓まざる探究の觸手を如何にのばしても、遂に到達する事が出来ず、却つて人間的知性の絶望に於いて始めて開かれる如き領域——それを我々は宗教的領域と名づける——に於いて我々の感ずる恐怖、それこそ眞に内世界的な恐怖であるが、この恐怖こそ我々にとつて根柢的である。ここでは人間知性はその恐怖を生ぜしむるものに對して、何等抗争の手段を持たず、たゞ無限の墜落を戰慄しつつ、拱手傍觀する外はない。佛教に於ける地獄の教説は、かくの如き恐怖を最も象徴的に表現せるものである。しかも地獄の眞に恐怖を生ぜしむる所以は、たゞその受苦の相の酷烈なるに依るといふよりは、^①「汝獨地獄燒爲惡

業所食」と云ひ、「汝本作惡業爲欲癡所誑彼時何^②不悔、今悔何所及」と云ひ、「妄語第一火」と云ひ、「一切風中業風第一」と云ひ、更に「火燒則可滅業燒不可滅」と云へるが如き、最も象徴的な表現に依つて、内世界の見えざる事實が明かにせられてゐるからである。若し地獄が實體的なるものであるならば、我々はかくの如き根柢的な恐怖を感じ得ないであらう。それは見えざる嚴肅な事實であり、然もこの事實が我々の全存在を通して、最も主體的に内觀せられ、そこに最も内世界的な恐怖の根源は存するのである。ここでは我々の高貴な知性も、はたまた強靱な意志も、これと抗争すべき手段も方法も持たない。寧ろ知性も意志も感情も凡てを包括して、我々の存在そのものが無限の深淵にたゞき込まれる。ここに^③「地獄は一定すみかぞかし」の主體的體驗が生れる。この體驗、即ち人間の最も根柢的な恐怖を通して、凡ゆる人間的な主我性が放捨せられ、^④「念佛はまことに淨土にむまるゝたねにてやはんべらん、地獄におつる業にてやはんべらん、總じてもて存知せざる」底の、人間的判斷を超え、合理不合理の境をも過ぎて、^⑤「彌陀の誓

願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなり
 と信」する謙虚な信は成立し、この信を成立せしめる領
 域として、攝取不捨の救済可能の世界が仰ふがれる。さ
 れば攝取不捨の世界こそは地獄一定の世界に對して、所
 謂救済を可能ならしめる、最も根源的な世界である。こ
 ゝに攝取不捨の世界が、地獄一定の我々に對して持つ構
 造とその意義を考へてみたいと思ふ。

- ① 『往生要集』上本三左。 六左。
- ② 『同』 七左。
- ③ 『同』 九左。
- ④ 『同』 一〇右。
- ⑤ 『同』 第一章。
- ⑥ 『歎異鈔』第二章。
- ⑦ 『同』 第一章。

二

攝取不捨の教説に就いて、最初に注意せられねばならぬのは、勿論『觀無量壽經』である。即ち①『同經』眞身觀を明すに、

「無量壽佛有八萬四千相、一々相各有八萬四千隨形

好、一々好復有八萬四千光明、一々光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、其光明相好及與化佛不可具說」と云へるものこれである。經の當相から云へば、これは勿論定善所觀の境にあらはれた佛身の別相であつて、善導も『定善義』に、「五明下觀一身別相光益有緣」と科して、その前の「眉間白毫」以下が「四明總觀身相」に對せしめてゐる。若しこゝに無量壽佛と云へるものが、定善觀想にあらはるゝものであるならば、それは夙に宗祖に依つて批判せられた如く、化身でなければならぬ。然るに善導は淨土の三經に通貫する深い信念に立つて、無量壽佛を四十八願酬報の身とし、更に淨土を以て法藏比丘願力所成の報土と見て、是報非化の古今楷立と云はるゝ妙判を施された。されば我々はこの經に示される佛身の眞化を通して、その光益の意味を吟味し、如實なる攝取不捨の宗教的世界が如何なるものであるかを追究せねばならぬ。

善導に對する諸家の見解が如何なるものであるかは、今の所論に深い關係を持たないのであるから、我々は善導がこの無量壽佛を眞報身と判ぜるに對し、宗祖が『教

行信證』化卷に、「謹顯化身土二者佛者如無量壽佛觀經說『眞身觀佛是也』と云へる相違點に着目し、それを問題の端緒としたい。而してこの點に就いて、最初に問題を提供せるものは『六要鈔』である。即ち眞身觀の佛を化身とせる宗祖の見解に就いて、

「問彌陀報化諸師今家異解是也、天台淨影以下諸師立化身義、高祖大師破彼等義引諸經文存報身義、謂其所論本是觀經眞身佛也、而如今者併同他家諸師謬解忽背今師楷定正義、已云眞身何屬化身、是一大事最要法門、具預宣說欲開疑滯蓄其誠信。答寔是大要尤可開解、解有二義、一云眞身觀佛爲報身義置而不論、但今釋意別願酬因報身土者、身是念佛三昧教主、土又乘願所入土也、而彼眞身之佛體者、先約觀門所說身故、雖有眞實色身之名、若望念佛所見之身猶帶方便、依此義邊爲化身歟、二云言眞身觀佛是也者、此非指彼眞身報佛謂之化身、指眞身觀眞身所共之化身也、眞身本佛約其觀門所見邊時雖屬化身、約彼念佛衆生攝取不捨益時、其實體者是報身也、今化身者所謂經云於圓光中有一

百萬億那由他恆河沙化佛已上、指此化佛言眞身觀所說化佛、非其眞身則化身也」

と云つてゐる。こゝに挙げられた二義に就いて六要主は「所用宜在學者之意」と云つて二義併存してゐるのであるが、こゝに我々の注意したいのは、「眞身本佛約其觀門所見邊時雖屬化身、約彼念佛衆生攝取不捨益時、其實體者是報身也」と云へる言葉である。攝取不捨の光益に約する時はその佛が眞報身だといふことは、攝取不捨の光益が實に眞報身としての無量壽佛のものでなければならぬことを示したものである。それ故に宗祖も、「大無量壽經には攝取不捨の利益にさだまるを正定聚となづけ」と云ひ、攝取不捨が無量壽佛の光益なることを明かにしてゐられる。勿論『觀經』の文に於ける善導と宗祖との相違に就いては、善導が要弘相對して、要門の中に燦然たる弘願の顯彰をこの文に見、無量壽佛の光明が定善所觀の行者を攝取せず、却つて念佛の衆生を攝取し給ふを見るところに「釋迦は要門ひらきつゝ、定散諸機をこしらへて」「ひとへに專修をすゝめられた妙手法を發見されたに對し、宗祖は善導が「言弘願者如

大經説こと云ひ、或は「上來雖説定散兩門之益^⑦、佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名」と云へる極意を探つて、所謂隱顯の二義を立て、顯説に依れば經の當分は飽くまで定善所觀の境にあらはれる化身であり、流通の教説に基く隱説に依る時、この佛身は弘願をあらはす盡十方無碍光如來に外ならぬと見られたことは常に云はるゝ如くである。それ故に我々は釋迦が要門を開いて、ひとへに專修に徹する時、宗祖の隱顯なる勝れた見解が産れ出づることを知る。そして攝取不捨の光益に望めて、眞報身の如實なる姿を知らしめられる。

まことに宗祖が一謹按眞佛土者佛者則是不可思議光如來、土者亦是無量光明土也」と示された如く、眞佛土は不可思議の世界である。その不可思議の世界は如何にして我々に信知せられるのであらうか。眞の佛土を信知せしめるものこそ、攝取不捨の世界であることを我々は主張せんとするのであるが、この攝取不捨の光益こそ、不可思議なる世界を、不可思議なることに於いて、我々に眞の佛土を信認せしめんとするのであつて、そこに不可思議光佛の總相が説かれ、又別相が説かれ、その相に即

して相をあらしむる光益が説かれるのである。されば無量壽佛が八萬四千の相を持ち、その相の一本に八萬四千の隨形好を持ち、その好の一本に八萬四千の光明ありと説かるゝことも、定散諸機をこしらへて、專修をすゝむる釋迦の方便であり、この方便を通すことなしに、我々は眞佛を拜することは出来ぬ。數量に即して無數量の眞佛をあらはすと云はるゝのも、實に眞佛が象徴に依らざれば表はし得ぬことを示すものである。更に極論するならば、化佛を通すことなしに、我々は眞佛を信知することとは出来ぬとも云へるであらう。されば我々はこの眞身觀にあらはるゝ六十萬億那由他の化佛を通して盡十方無碍光如來の眞報身を見るのであり、形に於いて形なき眞の佛を拜むのである。而して形なき眞佛が形なきことを知らしむる爲にこそ、形をあらはすといふ時、その形に即して形なき姿を知らしむるものは攝取不捨の光益であると云はねばならぬ。まことに佛の不可思議光佛なる所以は、十方の衆生を攝取して捨てざる光益の故である。それ故に『大無量壽經』には十二光佛の象徴的表現を以て無量壽佛をあらはし、『阿彌陀經』には「彼佛光明無量照^⑧

十方國無所障礙是故號爲阿彌陀」と云ひ、又宗祖も行卷に「十方群生海歸命斯行信者、攝取不捨故名阿彌陀佛」是曰他力こと云つてゐられる。かくて我々は攝取不捨のはたらきを通して、我々の信行の歸依の道を明かにし、この歸依を通して有數量に即して無數量なる歸依の領域を信知せしめられる。こゝにこそ、善導が光益有縁と云つた攝取不捨の教説があらはるゝ所以がある。

- ① 『三部經』科本二七左。
- ② 『定善義』二十三左。
- ③ 『玄義分』十八左「法藏比丘在世饒王佛所行菩薩道時發四十八願……今既成佛即是酬因之身也」と云ひ、又『序分義』二十六右に「彌陀本國四十八願」と云ひ、身土を判じて『玄義分』十八右に「是報非化」と云へるに依つて明かである。
- ④ 『六要』會本八、三右以下
- ⑤ 『末灯鈔』一〇右。
- ⑥ 『玄義分』三右。
- ⑦ 『散善義』三〇左。
- ⑧ 『御自釋』三七右。
- ⑨ 『三部經』科本六左。
- ⑩ 『御自釋』九右。

三

かくて『觀經』の光明遍照十方世界は、『大經』の十二光に於ける無量光無邊光に當り、『阿彌陀經』に於ける光明無量照十方國に相當し、又念佛衆生攝取不捨は『大經』の無碍光に、又『阿彌陀經』の無所障礙に相應するのであつて、こゝに彌陀の名義、即ち無量壽佛が眞に如來たる所以をあらはすのである。この三經の深意を承けて世親菩薩は盡十方無碍光如來と示されたのであつて、こゝに攝取不捨の世界が持つ意味こそ、眞に我々の歸依の領域を明かにするものと云へるであらう。

然るに『觀經』のこの文に就いて、古來二の讀方のあることが指摘せられてゐる。即ち一には、「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」であつて、それは『觀念法門』に「如前身相等光一々遍照十方世界、但有專念阿彌陀佛衆生彼佛心光常照是人攝護不捨」と云へるに基くものである。又二には「光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨」と讀むのであつて、これは元祖の『觀經私記』に「是即前光明攝取念佛衆生不捨爲光明攝益也」と

あるに依るのであり、この場合には遍照の光明が同時に攝取の光明である。前者は所謂色心の二光を分つものであり、後者は色心不二の立場に立つものである。かくの如き善導元祖の相違に關して夙に着目したのは、『摧邪輪』の著者明恵であつて、彼は『選擇集』にこの二光を分たざることを破釋してゐる。我々は今この二の見解に絡んで、攝取不捨の世界を明かにする契機を掴み得るやうに思ふ。

この二義は何れを可とし、又何れを非とすべきでもなく、寧ろ二義共に存する所に、その眞義が開示せられることは、常に注意せられることであるが、我々も又そこに最も深い宗教的信樂の世界が示されてゐることを感ぜずにはゐられない。思ふに色心の二光を以て、一は遍照の光明であり、一は攝取の光明であると平面的に説明するのみで、果して如來願心の世界が開示されるであらうか。色心の二光を分つ場合、色光は八萬四千の相好より放たれる色身の光であり、心光は佛心者大慈悲是以無緣慈攝諸衆生」と説かるゝ佛心の光明なりと云はれる。定善所觀の境としては、かくの如き身光を見ることが出

來るでもあらうし、かくの如き象徴的表現に宗教的體驗の深さが察せられぬではないけれども、現實の我に歸つて、色光とはそも如何なる意味を持ち、如何にして見られるのであらうか。寧ろ宗祖が「佛者則不可思議光如來」と云つて、それを眞身觀の化佛に對せしめられたところこそ、眞の宗教的實在としての如來を信知せしめられる。それは我々にとつて、知性の逞しい高揚が如何にあがいても到達し得ぬ高次の實在であり、従つて見聞するよりは、たゞ信知せしめらるべきものである。従つて「佛心者大慈悲是」と云ふ如き心光の信知を通してのみ、遍照の色光は象徴せられ得る。それ故に我々の宗教的信行の道にあつて、眞に問題を提供するのはたゞ心光であると云ふべきであらう。こゝに我々は第二の讀方に注意せしめられる。

元祖は『選擇集』攝取章に、「彌陀光明不照餘行者唯攝取念佛行者」と云ひ、又前掲の『觀經釋』にも、「前光明攝取念佛衆生而不捨」と云つて、所謂色心の二光を分たず、「前光明」即ち色光がそのまゝ心光として攝取不捨の光明なることを明かにせられた。この元祖の解釋は

明かに色心の二光を別つ善導の立場と異つてゐるやうに見える。されば古來の解釋はその相違を解消する爲に色心不二を説き、特に『般若讚』に、「一々光明照十方不二爲餘緣、普照唯覺念佛往生人」と云へる文に基いて、遍照の光明は攝取の爲であり、攝取の光明を外にして色光があるわけではないと説明せられてゐる。思ふに佛は不可思議光如來として高次の實在であり、人間的知性を以てしては如何にしても把握し得ざるものである。それは感覺的に知見せられざるが故に、見えずして見える一如來生の佛である。さればこの佛を見る道は、善導がいみじくも喩説せる如く、四五寸の白道に比せらるべき微かなる道である。端的に云ふならば、それはたゞ念佛を通してのみ見られると云ふべきであらうか。見えずして見えるといふ時、見えずといふのは凡ゆる人間的知性、自力の執心が眞に絶望せられた境地を意味し、この人間的なるものに絶望し盡した限界境位を通して、仄かに知見せられる世界に念佛がある。されば元祖は攝取章の私釋に、

「私問曰佛光明唯照念佛者、不照餘行者、在何意」

乎、答曰解有三義、一者親緣等三義如文、二者本願義、謂餘行非本願故不照攝之、念佛是本願故照攝之。

と云つてゐる。こゝに餘行者を照攝せずといふことは、彌陀の光明に屬する缺陷ではない。この點に就いて曇鸞は實に明確な斷案を下してゐる。即ち

「問曰、若言無碍光如來光明無量、照十方國土、無所障礙者、此間衆生何以不蒙光照、光有所不照、豈非有礙耶」

と云ひ、これに答へて、

「礙屬衆生、非光礙也」

と。まことに本願の行たる念佛を通さずして、如何にして本願成就の無量壽佛が拜まれるであらうか。「餘行非本願故不照攝之」といふことは當然のこととでなければならぬ。それは光ありとも見る能はざる盲者にひとしい。それ故に光はなきにひとしく、まして攝取不捨の働きが心證せらるべきはずもない。それ故に自餘の諸行を抛つ地獄一定の内觀を通して、念佛の一行に歸したものと云ひ、彌陀の光明に照攝せられるのである。そして彌

陀の光明に照攝せられる念佛衆生のみが、始めて光明遍照十方世界と無量壽佛の世界を明かに見るのである。それ故に我々の行信の道にあつても、遍照の光明と攝取の光明は結局ひとつであり、元祖の讀方を通して、善導の讀方の眞意に徹することが出来ると云ひ得よう。されば宗祖の解釋を見ると攝取不捨を常に心光の利益とし、そこに常に佛心を拜まれたのである。『淨土和讃』に

十方微塵世界の

念佛の衆生をみそなはし

攝取して捨てざれば

阿彌陀と名づけたてまつる

と云ひ、近く『正信偈』には、攝取心光常照護とも云はれてゐる。又その他の諸釋を検するに、『銘文』^⑧には、「この眞實信心をえむとき、攝取不捨の心光にいりぬれば正定聚のくらゐにさだまる」、「無碍光佛の攝取不捨の心光をもて信心をえたるひとをつねにてらしたまふ」、「ひころかの心光に攝護せられまひらせたる金剛心をえたる人なれば正定聚に住するゆへに」、「てらすといふはかの佛心光におさめとりたまふとなり、佛心光はすなはち阿彌陀

陀佛の御こゝろにおさめとりたまふとしるべし」等とあり、『一念多念文意』には、「眞實信心をうればすなはち無碍光佛の御こゝろのうちに攝取してすてたまはざるなり」、「不捨といふは信心のひとを智慧光佛の御こゝろにおさめまもりて、心光のうちにときとしてすてたまはずとしらしめんとまうす御のりなり」等と釋し、更に『唯信鈔文意』には、「攝取のひかりとまうすは無碍光佛の御こゝろのうちににおさめとりたまふゆへに、金剛の信心とまうすなり」等、何れも攝取不捨を以て心光の利益とし、しかも心光の外に色光を説かれたことは殆んどない。これ恐らくは、我々の行信の道に於いて、攝取不捨の心光を離れて遍照の光明即ち色光を云ふが如きは、徒らなる概念的思辨に外ならぬからである。それ故に『往生要集』の有名な言葉『一念多念文意』^⑩に引いて、

「首楞嚴院の源信和尚のたまはく、我亦在彼攝取之中、煩惱障眼雖不能見、大悲無倦常照我身と、この文のこゝろはわれまたかの攝取のなかにあれども、煩惱まなこをさへてみだてまつるにあたはずといへども、大悲ものうきことなくして、つねにわがみをてらしたまふとのたま

へるなり」

と釋し、同じ意味を『高僧和讃』に

煩惱にまなこさへられて

攝取の光明みざれども

大悲ものうきことなくて

つねにわが身をてらすなり

と詠つて、無量壽佛の光明が見えずして見える不可思議光であり、見えずして見るものはたゞ我々が念佛の信行を通してある内面的光景を明かにせられたのである。

- ① 『観念法門』十一左。
- ② 『觀經私記』漢灯』二、十三右。
- ③ 『摧邪輪』下『淨全』八、七四〇以下。
- ④ 『科本』二八左。
- ⑤ 『般若讚』二〇左。
- ⑥ 『選擇集』本三十一右。
- ⑦ 『淨土論註』上四左。
- ⑧ 『尊號眞像銘文』本二左、『同』一二左、『同』末三左、『同』四左。
- ⑨ 『一念多念文意』三左、『同』一〇左。
- ⑩ 『唯信鈔文意』一五左。
- ⑪ 『一念多念文意』一一左。

四

我々は念佛を信行する道に於いてのみ、無量壽佛の心光を見ることを明かにした。されば經に念佛衆生攝取不捨とあつても、それが念佛の利益であることに於いて、そのまゝ信心の利益であることは明かである。このことは、宗祖が『略文類』①に、「發信稱名光攝護」と云つて、攝取不捨の光益を稱名念佛に就いて明しつゝ、その光攝護の相を直ちに「無邊難思光不斷更無隔時處諸緣」と云つてゐられる。これ發信の一念に攝取の光益にあづかり、この憶念の心から稱名念佛は自然に流出するものなるが故に、發信稱名と云へるのであつて、それは『報恩講式』②に「憶念稱名有精鎮關不斷無邊光益」とあるに相應するものである。されば『高僧和讃』に

金剛堅固の信心の

さだまるときをまちえてぞ

彌陀の心光攝護して

ながく生死をへだてける

とあるを始めとして、宗祖の解釋は常に攝取不捨を信心

の利益としてゐられる。然しそれだからと云つて、『觀經』の念佛衆生とある念佛がそのまゝ信心であるといふのではない。『觀經』の所顯は飽くまで要弘相對して、要門諸行に對して弘願念佛の利益を示すのであるから、それが夙に善導の明かにせるやうに稱名念佛であることは明かである。こゝに元祖が彌陀の光明唯念佛の行者を攝取すと云へる所以が存するのであつて、念佛にこそ選擇本願の飽くまでも強烈な選擇攝取の意志があらはれてゐる。さればかくの如き彌陀の願心に即して云へば、この願心の領受せられる信の一念にこそ、われ／＼は強烈無比な攝取不捨のはたらきを信知することが出来るであらう。

思ふに、光明攝取の世界は見えすして見える世界であると表現してもいゝであらう。見えすして見える自己矛盾の世界が攝取不捨の世界であると云ひ得るならば、その自己矛盾を同時に成立せしめる契機は何處に存するのであらうか。それは宗祖に依れば明かに信心であるが、この信心の内面的構造は攝取不捨の世界との連關に於いて、始めて明かにせられるであらう。『末灯鈔』^③に

「眞實信心のさだまると申も、金剛の信心のさだまるとまふすも、攝取不捨のゆへにまふすなり」

とある言葉は、明かにこのことを物語つてゐる。まことに攝取不捨の世界は、「眞實信心のさだまる」自覺の中に於いてのみ開示せられる。しかしその信心のさだまるのは、「攝取不捨のゆへにまふす」のであるから、この無量壽佛の攝取して捨てざる無窮の志向性は、直ちに「光明遍照十方世界」の無量壽佛を觀知せしむるのでなければならぬ。然もその光明が遍照十方であることに於いて、攝取不捨の世界は無周邊的な佛心者大慈悲の世界であることを豫想せしめる。このことは、論主が盡十方無碍光如來と云ひ、この如來の世界を三種莊嚴に開いてその無周遍的な性格を明かにし、そこに如來の願心を仰いだことに依つても知られる。そしてかくの如き如來の願心を充實せしめる契機が信心と呼ばれるものである。それ故に宗祖にあつては、

④ 「眞實信心をえむとき攝取不捨の心光にいりぬれば、正定聚のくらゐにさだまるとみえたり」

⑤ 「眞實信心をうればすなはち無碍光佛の御こゝろのう

ちに攝取してすてたまはざるなり」

「誓願眞實の信心をえたるひとは、攝取不捨の御ちかひにおさめとりてまほらせたまふによりて行人のはからひにあらす、金剛の信心となるゆへに正定聚のくらゐに住すといふ」

等といふ如き信に依つて攝取ありとする文に對して、

⑦「この人は攝取してすてたまはざれば金剛心をえたる人とまふすなり」

「如來の誓願を信する心のさだまるとまふすは、攝取不捨の利益にあづかるゆへに不退の位にさだまると御こころえさふらふべし」

「一念發起信心のとき無碍の心光に攝護せられまいらせ候ゆへに、つねに淨土の業因決定すとおほせられ候」
 「往生の心にうたがひなくなり候は、攝取せられまいらせたるゆへとみえて候」

「無碍光如來の攝取不捨の御あはれみのゆへに疑心なくよろこびまいらせて、一念にて往生さだまりて誓願不思議とこころえ候」

等と攝取に依つて信心起るとの二釋が隨所に見えてる

る。このことは御文にあつても同様であつて、⑧「一念發起するところにてやがて攝取不捨の光益にあづかる」といふは前者であり、⑨「攝取の光明にあひたてまつる時尅をさして信心のさだまるとは申すなり」とあるが如きは後者であり、『御文』に於けるその他の類文は頗る多い。

こゝに我々は救済の體驗として、無周邊的な攝取不捨のはたらきに、はたらきとしてのひとつの方向を與へるものが信心であるといふこと、従つてまた信心は曠劫流轉の寄邊なき衆生、「地獄は一定すみかぞかし」とその存在性に根本的動搖を來した衆生に、存在の根源性を與へるものであることを知らしめられる。それ故に信心は何等の志向性なき盲目的意識ではなく、曠劫流轉の寄邊なき存在性に、無有出離之縁の限界境位的自己否定を踏切點として、自己の存在性にひとつの確固たる根源を附與する意識である。この根源に於いて始めて我々の魂は限りなき安らひを感じ、この根源から人生的なるものに死んで甦る息吹を感じるのである。そこに佛の作さしめ給ふところを作し、佛の遣らしめ給ふところを遣るといつた、自然法爾の生活が生れる。

かくて救済の體驗は、一如來生の見えざる佛が攝取不捨のはたらきに於いて、質的に無限の差異を持つ煩惱具足地獄一定の衆生と、共同の生を營むことに依つて成立し、そこに超越的な如來が歴史的現實となるのである。

而してこの如來との生の共同に於いて如來の願心を眞に攝取不捨たらしめるもの、換言すれば如來をして歴史的現實たらしめるものは、徹底的な自己罪障の自覺即ち一切のはからひを捨てた自力性の無を媒介とする合理不合理を超えた絶對的信である。それ故に、一切の人間の判斷(はからひ)を超えた眞實信に於いて、我々は如來との共同の生を感じそこにこそ救済の體驗は存するのである。この意味に於いて信の自覺は、如來との生の共同といつても、無有出離之縁と自己の一切のはからひに死ぬことに於いて、その無の底から攝取して捨てざる無周邊的な願力に包まれてゐる自覺であり、従つてこの自覺を生ぜしむる根源は、この攝取不捨の願力に外ならず、それが他力の信と呼べるゝものである。されば自覺と云つても、表現的形成的に自己を見る如き自覺ではなくて、そは如來の願心の現行する如實なる姿を見るに外なら

ぬ。そこでは我々はたゞ如來に包まれて生き、如來の中に生くるのであつて、如來と對立した自己があるのではない。それ故にこそ、かくの如き信仰體驗に即して、我々の生活は自然法爾と云はれる。そこでは「はからひ」自我は無であり、たゞ願力のみが働くのである。かくの如き如來との共同の生は、それ故に「はからひ」自力無効の絶對否定に於いて、たゞ如來の御はからひに生きる生活である。こゝにのみ攝取不捨の世界は見られなければならぬ。そしてかうした如來との共同の生を攝取不捨に即して明かにせるものが、かの三緣釋である。

- ① 『淨土文類聚鈔』八左。
- ② 『報恩講式』本願相應の徳を嘆ずる下。
- ③ 『末灯鈔』一七左。
- ④ 『尊號眞像銘文』本二左。
- ⑤ 『一念多念證文』三左。
- ⑥ 『唯信鈔文意』五左。
- ⑦ 『末灯鈔』八右、『同』一七左、『同』二四左、『同』二九右、『同』三二右。
- ⑧ 『御文』一帖目四通。
- ⑨ 『御文』三帖目初通。

五

救済の體驗は佛の側から云へば攝取であり、衆生の側から云へば信心であつて、攝取と信心とは相關的同時的に成立するものである。即ち信心を眞實の信心として確證するものは攝取であるが、攝取を攝取として受容するものは信心でなければならぬ。彌陀の攝取がなければ信心は始めから生れなかつたであらうが、信心がなければまた攝取も可能とはならない。それ故に信心は攝取の願心が働く無の場所、凡ゆる自力的なものに絶望する眞の絶望の場所でなければならぬ。人間の罪障の自覺を契機とする人間的なるものへの絶望は、それが眞實の絶望である限り、信心へと轉成されるものである。地獄は一定すみかぞかしといふ悲痛な現實の限界境位的體驗を契機として轉成される信心こそ、その信心を基礎づけ、最も根源的に確證するものとして、攝取の願力を味識するのである。元祖は攝取章の私釋に於いて、「念佛是本願行、諸行是非本願、故云全非比較一也」と云つてゐるが、まことに自力的な諸行はそれを本願の行たる念佛

に比すれば、全く比較に價しないものである。何故ならば、諸行は自力的なことに於いてこの諸行に固執する限り、願力の働く場所は開かれてこない。諸行が空ぜられてそこに自力的な一切の殘滓を残さざる無の姿が現する時、始めて本願の行としての念佛が現行する。従つて諸行は非本願の衆生の行であり、念佛は如來の本願の行である。それは既に質的に異つたもので、比較に非すと云はずして何ぞやである。

かくて自力の諸行が空ぜられて、ひとへに他力の念佛に歸する無の場所にこそ、念佛衆生攝取不捨と攝取の利益は働くのである。この意味を明かにするものが三緣釋である。即ち善導は『定善義』にこの『觀經』の文を釋して、

「問曰備修衆行、但能廻向皆得往生、何以佛光普照唯攝念佛者、有何意也。

答曰、此有三義、一明親緣、衆生起行口常稱佛佛、即聞之、身常禮敬佛、佛即見之、心常念佛佛即知之、衆生憶念佛、佛亦憶念衆生、彼此三業不相捨離、故名親緣也、二明近緣、衆生願見佛佛即應

念現在ニ目前ニ故名ニ近縁ニ也、三明ニ増上縁ニ衆生稱念即除ニ多劫罪、命欲レ終時佛與ニ聖衆、自來迎接、諸邪業繫無ニ能碍者、故名ニ増上縁ニ也、自余衆行雖レ名ニ是善、若比ニ念佛ニ者全非ニ比較ニ也と云つてゐる。

思ふにこの三縁釋は、最も具體的に攝取不捨の世界を表象せるものである。攝取は如來の側から救濟の體驗を語るものとして、親しく衆生に語りかける無限の大慈悲としてあらはれ、そこに如來の何であるかを明かならしめる。然もこの場合、如來はその無漏性の故に有漏性の衆生とは全く相容れざる限界を持ち、如來と衆生との間には埋めることの出來ぬ溝渠が存する。しかし衆生と絶對的に斷絶し、衆生の如何なる知性も意志も感情も、それが人間的である限り達し得ぬ世界に如來の世界は存するが故に、それ故にこそ、如來は無量光無量壽として、無周邊的な攝取の光を以て我々を包むのである。されば我々は既に攝取せられてゐる。それが光明遍照十方世界とあらはされた世界である。かくて我々は如來の懷に抱かれつゝ、然も如來は却つて我々の飛躍し得ない超越的

な彼方にある。換言すれば如來は見えざる世界にあり、それ故に、我々を無周邊的な慈悲を以て、抱いてゐると云はれよう。かくてこの見えざる如來が見える仕方、如來に抱かれてゐるといふ救濟の體驗に通ずるたつたひとつの道は、悲痛な現實の罪障を契機として、一切の自力的なものに絶望するその絶望を切點として、轉成される信心である。それ故に信心に於いてのみ、如來はその親近性を示すのであり、それを示す仕方が攝取不捨である。さればこそ、遍照の光明が念佛の衆生をのみ攝取するのであつて、善導が問へる但能廻向の諸行の行者は攝取せられない。諸行の自力性を固執する行者は飽くまで如來と斷絶せられた關係に立つのである。こゝに於いて攝取こそが、斷絶せられてゐることに於いて結びつき、結びつくことに依つて本來包れてゐたことを明かにするのである。凡ゆる衆生を包む遍照の光明は、かくてたゞ衆生の無明の故に、疑惑の故に、無限の見えざる彼方にあつたのである。けれども如來がかくの如き斷絶の彼方にあるといふ自覺、即ち地獄一定の救はれ得ざる自覺が、攝取不捨の光を滿入せしめる場所となる。されば攝

取不捨の世界は對象的に彼方にあるものではなくて、地獄一定の絶對的な自己否定を契機として、その場所を充實するものとして、超越的な彼方から内在的に顯現するものである。それ故に我々が攝取の光は見えずして見えるといふ時、自力的なる眼を以ては見る事が出来ぬけれども、それが徹底的な自己否定を通して轉成された信心に於いては、明かに見るのである。けれどもこの信心は攝取の光を受容する姿であるから、それが見えるのは却つて攝取のはたらきに依つて見えるのである。即ち我々が無周邊的な攝取の光に包れてゐるといふ自覺として見るのである。こゝに人生的なものに死せる我々が、この光と共にあり、如來と共にあるといふ喜びの生が新しく始るのである。それが救濟の體驗である。

かくの如き理解に於いて、我々は善導の三緣釋を眞に味得し得るのではなからうか。特に親緣と近緣とは、如來と衆生とが共同の生を營む親近性をあらはすものであつて、その親近性は常に攝取不捨のはたらきとして受容せられる。即ち「衆生起行口常稱佛佛即聞之、身常禮敬佛佛即見之、心常念佛佛即知之、衆生憶念佛者

佛亦憶念衆生、彼此三業不相捨離」と云へるものは、身口意の三業に於いてあらはされた具體的宗教生活の如實なる姿である。蓋し我々の宗教生活に於いて、身口意の三業が一具のものとして生起することは極めて自然である。然も衆生の三業に即して、その三業に相從して如來の三業と云はるゝたしかなる應答が感ぜられるところこそ、まさに信心の如實な姿はある。されば身口意の三業に互る一切の所作即ち起行は、但能廻向の諸行等とは全く質的に異つた如來の行であつて、そこに善導は注意深く起行の語を用ひてゐる。起行は一心の安心から流出せるもので、信の自然なる行爲的發露である。それは常に衆生の行であるけれども、それが一心流出のものであることに於いて、如來の行であると衆生には能感せられる。如來と共なる信の生活にあつて、それは常に如來の行として、如來のはたらきとして感ぜられ、従つて我々の生活に表はれる一切の所作に如來の應答を聞くのである。それが親緣と云はるゝものである。このことは、善導が「心常念佛」の意業に重ねて、「憶念佛」の意業をも加へたことに依つて、愈、明かにせられる。即ち古來注意

せられ來つたやうに、心常念は起行に屬する相續常で、佛恩報謝の行業であり、憶念佛は不斷常の心で一心等流の憶念である。こゝに憶念とは憶持不忘の義であつて、常恒に相續する他力回向の信心である。宗祖が『唯信鈔文意』^②に、

「憶念といふは信心まことなるひとは、本願をつねにおもひいづることゝのたえずつねなるなり」

と云ひ、又『淨土和讃』に

光明てらしてたへざれば

不斷光佛となづけたり

聞光力のゆへなれば

心不斷にて往生す

と宣へる如く、それは如來のたえざる攝取のはたらきを示すものである。それ故に衆生の憶念に即して如來の憶念が説かれてゐるのである。善導が『觀念法門』^③に攝取不捨を攝護不捨と云ひ、攝取がそのまゝ、護念なることを示せるもこの意味である。この憶念の信より三業に互る起行は起るのであつて、まことに「他力の安心よりもよほされて佛恩報謝の起行作業はせるべき」ものである。か

くて親縁はまさに如來と衆生との共同の生が、攝取不捨のはたらきとして、あらはるゝ具體的姿を示せるものと云はねばならぬ。

次に「衆生願見佛佛即應念現在目前」と云へる近縁も亦かくの如き如來と衆生との親近性を示すものであつて、元祖はこの近縁を釋するに平生と臨終の二義を出し、特に平生の義に就ては「若人念佛阿彌陀佛無數化身觀世音化大勢至常來至此行人之所乃至若人不念佛則恒沙聖衆一箇不接無數化佛一佛不來、念與不念得失無淵行者應知」と云ひ、次に臨終の義に就いても臨終の時、「應聲現目前前」と云ひ、之を結んで「明知念佛衆生與佛甚近也」と述べてゐられる。されば念に應じて現に目前に在すのは、本來我々が如來に依つて包まれ、抱かれてゐるからであり、包んでゐる如來のはたらき、即ち攝取不捨のはたらきの故にこそ、このはたらきへの應答として我々の信心は成立するのである。この故に近縁も亦如來と衆生との共同の生が營れる内面的構造を示すものと云はねばならぬ。

① 『定善義』二十五左。

- ② 『唯信鈔文意』一〇左。
- ③ 『觀念法門』一一左。
- ④ 『改邪鈔』本二三右。
- ⑤ 『觀經釋』『漢灯』三、五左。

六

かくて親縁と近縁とは衆生と如来との親近性を示すものであり、然もその親近性は常に攝取不捨の如来のはたらきからあらはるゝものであつた。それ故に親近二縁も亦増上縁に外ならず、親近二縁の外に増上縁があるのではない。さればこゝでは、親近二縁の別名に對して第三に増上縁なる總名を擧げたものであることは古來注意せられた如くである。

思ふに親近二縁に於いて明かにせられたやうに、救済の體験は如来と衆生との共同の生、否如来に包れてゐるといふ確信に於いて味得されるのであつた。然しかくの如き體験は、直接無媒介に生起するのではなくて、如来と衆生との限りない質的斷絶の自覺を契機とするのであつて、この自覺が深まれば深まるほど、救濟實現の地盤

はいやましに豊かに開かれてくるのである。されば『數異鈔』^①の著書は鋭くも、

「しかれば本願を信ぜんには他の善も要にあらす、念佛にまさるべき善なきゆへに、惡をもおそるべからず、彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへに」

と道破したのである。こゝでは衆生の諸邪業繫が障礙になるのではない。却つて罪惡深重煩惱熾盛の凡夫であることを自覺せぬところに、眞の障礙はあつたのである。

それ故に罪惡深重煩惱熾盛の故に地獄一定の衆生に過ぎぬといふ絶對的な自己否定こそは、我々を驅つて「念佛まうさんとおもひたつこゝろ」^②即ち、「攝取不捨の利益にあづけしめたまふ」「彌陀の誓願不思議への絶對的信に轉成せしめるのであつて、救済の成立は「たゞ信心を要とす」るのである。しかもかうした罪障の自覺は、罪障を持つ主體それ自ら生起するのではない。却つて闇を明かならしめるものが光であり、白を明かならしむるものが黒であるやうに、そこには佛光普照の如来の世界からのはたらきかけがあつたからである。そしてそのはたら

きをあらはならしむる契機が、罪障の自覺である。それ故に、「衆生稱念卽除_二多劫罪_一、命欲_レ終時佛與_二聖衆_一自來迎接、諸邪業繫無_二能碍者_一」なのである。

こゝに稱念とあるのは、念佛衆生を釋せるものであるが、親縁を釋する憶念に照合して云へば、憶念稱名が念佛衆生であつて、念佛衆生攝取不捨は如來と衆生との共同の生を示すものであることが知られる。而してこゝに注意せられるのは、かくの如き念佛衆生に就いて、「除_二多劫罪_一」と云ひ、更に重ねて「諸邪業繫無_二能碍者_一」と云へることである。この點に就いては、既に香月院師が『御一代記聞書』^④の

「順誓まふしあけられ候、一念發起のところにてつみみな消滅して正定聚不退のくらゐにさだまると御文にあそばされたり、しかるにつみはいのちのあるあひだつみもあるべしとおほせさふらふ、御文と別にきこえまふしさふらふやとまふしあけさふらふとき、仰に一念のところにてつみみなきえてとあるは、一念の信力にて往生さだまるときは、つみはさはりともならず、さればなき分なり、いのちの娑婆にあらんかぎり、つ

みはつくるなり、順誓ははやさとりてつみはなきかや聖教には一念のところにてつみきえてとかくなりと仰候」

とある文を例證にせられた如く、一念の時法徳として罪障は滅せらるべき性格を持つと共に、かくの如き法徳を能感せしむる契機はまた罪障にあることに於いて、命のある限り罪障は滅しないし、又滅してならない性格を持つものである^⑤。然しながら、滅してならないといふことは、それが法徳として滅せられてゐることに於いて、常に障碍とはならないのであつて、こゝにこそ攝取不捨の光の増上縁たることは示されるのである。まことに衆生は限りなく如來と斷絶せられてゐる罪障の自覺を契機としてのみ、却つて我々衆生を包む攝取不捨の光明の世界に躍入するのである。それ故に「諸邪業繫無_二能碍者_一」とあらはされたところにこそ、増上縁の意義は明瞭なのであつて、それは我々衆生が如來と共なることに於いてのみあらはれる體験である。

かくて我々は三緣釋に於いて、攝取不捨の光明は我々衆生を包み、然も包むことに於いてその衆生性を焼き盡

す火であることを感ずる。それ故に攝取不捨の光は我々の生活全體に點火して、我々の罪障の生活をそのまゝ淨化するのである。煩惱がなくなり、罪障が消えるのではない。若し煩惱罪障が消失するならば、如來の火も消えるであらう。却つて罪惡深重煩惱熾盛なるが故にこそ、攝取不捨の火は燃えさかるのである。従つて如來と生を共同にする親近性と云つても、二のものが親近してゐるといふ如きものではなく、二のものがひとつになつて燃えてゐるのである。佛凡一體といはるゝ救濟の體驗もこの意味をあらはすものでないであらうか。かくて如來の火に燒かれて、凡てが燒きつくされてゆく生活にこそ、救濟の體驗は實を結び、眞實の意味の宗教生活は始るのである。

① 『歎異鈔』二右。

② 『歎異鈔』初左。

③ 『同』右。

④ 『御一代記開書』一七左。

⑤ 『佛教研究』六ノ四、「念佛信仰の實踐的性格」拙稿参照。

⑥ 三緣釋はまさに攝取不捨の世界を明かにする重要な文であるに拘らず、宗祖は『廣』略』文類に引用してゐられな

い。この點に就いて、『觀經微笑錄』には、宗祖が攝取の利益を願力の強緣と見給ふからであると云つてゐる。即ち、元祖の『選擇集』攝取章に依ると、私釋に攝取の所由を擧げて三緣の義と本願の義としてゐる。その本願の義とは念佛が本願の行なる故に攝取すると云ふのであつて、その證文に『往生禮讚』三〇左の「彌陀身色如金山、相好光明照十方、唯有念佛蒙光攝、當知本願最爲強」と云へる文を證文としてゐられる。こゝに本願最爲強とある強の一字は攝取の理由を顯す點睛の文字であつて、將に本願力の故に攝取のはたらきありと示すものである。されば宗祖は彌陀の本願誓願を増上緣とし給ふのである。この故に果上の佛力に約して攝取をあらはす三緣釋を引かず、本願力に約する『禮讚』と『觀念法門』の「恒有惠念」との文を信卷末に引用せられたのである。されど、宗祖は大信心を心光攝護の一心と呼び、又現生十種の益の中には心光常護之益を擧げてゐられるのであつて、こゝではかうした攝取不捨の世界を示すのが中心であるから、宗祖の扱ひに於ける差異に就いては觸れなかつた。